

新型コロナウイルス感染拡大期における授業に関する考察 ～2014年度履修生 DP 調査との比較から～

特別支援教育コース・榎木暢子

1. 授業の概要

「肢体不自由児の教育課程及び指導法」は特別支援教学校教員免許（知・肢・病）取得の必修科

目である。授業内容を表1に示した。受講生数は32名であった。

表1 「肢体不自由の教育課程及び指導法」授業内容

内容	方法（当初）	方法（感染拡大後）
肢体不自由教育の歴史、教育課程、学習指導要領	講義：遠隔非同期	変更なし
肢体不自由児の特性に応じた指導	講義：遠隔非同期	変更なし
身体の動きへ指導、摂食指導	演習：対面	変更なし
指導案検討・模擬授業	演習：対面	①授業者のみ登学 遠隔非同期併用 ②全員遠隔非同期
最終試験	対面	確認テスト 総括レポート

2. 授業方法の工夫と授業評価

2-1 授業方法の工夫

新型コロナウイルス感染予防対策として、講義部分は遠隔非同期、演習及び模擬授業については対面で行う計画を立てた。

(1) 「身体の動き」の演習

3密を避け、身体を動かすスペースの関係から受講生を2班に分け、2回にわたって対面実施した。関節や筋肉の動き、筋緊張の緩め方など、個別でできる内容を中心に指導し、身体介助の演習ではフェイスシールド及びビニール手袋を装着し、必要最低限の手技のみとした。

(2) 「摂食指導」の演習

感染防止対策を十分に行った上で、対面実施した。飲食を伴う実習であることから、フェイスシールド及びビニール手袋を装着し、摂食の瞬間以外のマスク着用を徹底した。

(3) 模擬授業

32名を6班に分け、6回に渡って実施した。

2-2 新型コロナウイルス感染拡大による模擬授業の授業形態の変更

(1) 模擬授業初回

全員が登学し、2班ずつに分かれて、授業者を含む班が模擬授業を行い、もう1班が観察して、授業後の検討を行う形式で実施した。

(2) 模擬授業2～4回目

感染拡大を踏まえ、模擬授業を行う履修生だ

け登学することとし、登学しない者はビデオを見て、コメントを書く形式に切り替えた。

(3) 模擬授業5, 6回目

全ての学生が登学できなくなり、授業者はMoodleに模擬授業で使用する自作教材教具のねらいと指導方法について写真付きの使い方を提出することとした。他の履修生は教材の使い方と指導案へのコメントをMoodleのフォーラムに書き込むこととした。

(4) 最終試験

Moodle上での確認テストと総括レポートに振り替えた。

2-3 受講生対象の後期 DP 調査

受講生の成績に一切影響しないことを約束し、授業に対する自由な回答を保障するため、最終課題提出後にMoodleにて、回答を依頼した。

受講生32名中18名が回答し、回収率56.3%、回答者の内、3回生が15名(57.7%)、ストレート院生0名(0%)、現職教員院生が3名(75.0%)であった。表2, 表3に調査項目を示した。表2の項目については、1:とてもそう思う、2:ある程度そう思う、3:そう思わない、4:授業の目標・内容がこのDPとは無関係であるであることから、1に近いほど、とてもそう思うが多いことになる。表3については実数・実時間数の回答を求めている。

表 2 DP 調査項目①

内容	質問文
知識・理解	教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。
技能	教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。
思考・判断・表現	教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について、専門的な知見をもとに、その対応方策を理論に基づいて総合的に考え、その過程や結果を適切に表現することができる。
興味・関心・意欲、態度	教師としての使命感や責任感を持ち、自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ、自主的に社会に貢献しようとする。

表 3 DP 調査項目②

	質問文
時間外学習時間 (課題・予習・復習)	この授業で出された課題や予習・復習のために、授業時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか。
時間外学習時間 (それ以外)	この授業で出された課題や予習・復習をおこなうこと以外の理由で、この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか。
図書・論文読書数	この授業を受けて、自分で自発的に読んだ本や論文の数はいくつですか。ない場合は0とご入力ください。
自発的活動	この授業をきっかけにして取り組んだ、教育実践や授業時間外での制作等の自発的活動は何件ありますか。ない場合は0とご入力ください。

3. 調査結果と考察

表 4, 5 に今年度受講生の DP 調査の結果を示した。また、表 6 に 2014 年度に筆者がほぼ同様の内容で開講した同授業の授業外学習時間及び

自主的学習活動について示した。2014 年度は受講生 28 名中 23 名の回答があり、当時の DP 調査では学部生・院生の別は不明である。

表 4 DP 調査項目①結果

	知識・理解	技能	思考・判断・表現	興味・関心・意欲、態度
3 回生	1.33	1.53	1.67	1.53
現職院生	1.33	1.67	1.67	1.00
合計	1.33	1.56	1.67	1.44

表 5 DP 調査項目②結果

	時間外学習時間 (課題・予習・復習)	時間外学習時間 (それ以外)	図書・論文読書数	自発的活動
3 回生	1.80	0.53	0.87	0.27
現職院生	2.33	0.67	6.33	1.33
合計	1.89	0.56	1.78	0.44

表 6 2014 年度「肢体不自由児の教育課程及び指導法」授業外学習時間及び自発的学習活動

	時間外学習時間 (課題・予習・復習)	時間外学習時間 (それ以外)	図書・論文読書数	自発的活動
2014 年度	1.22	0.74	1.48	0.61

(1) DP 項目 1 について

知識理解については、概ね授業のねらいを達成できていることが示唆されている。また、技能や思考・判断・表現については、授業実践力に関わることから、このような結果になっていることが推測される。

(2) 時間外学習及び自発的活動等について

2014 年度履修生と比較して、今年度の履修者は時間外学習時間の総計は 30 分程度長くなっていることがわかる。また、課題や予習・復習に掛ける時間が長くなったことでそれ以外の時間外学習時間が短くなったことが推測される。時間外学習時間の総計は 2014 年度の 1.96 時間より総じて長くなっており、遠隔非同期による学生の 1 つの授業に掛ける時間が増加している可能性が示唆される。また、課題や予習・復習に時間がかかり、新型コロナウイルス感染拡大による行動自粛などの影響もあり、それ以外の時間外学習時間や自発的活動が減少していることが伺える。一方で、今年度の履修生における時間外学習時間の捉えが統一されにくく、授業時間の 90 分を差し引いていない可能性もあり、慎重に考察する必要は否めない。

4. まとめ

授業方法の変更が、学生の時間外学習に影響を与えた可能性は高いが、それ以上に重要な点は、時間外の読書量や自発的な活動量の減少である。関心・意欲等が低くないにもかかわらず、授業で学んだことから実践につながる活動を行ったり、知識や思考を広げようとしたりすることができない点は、教員としての資質、幅広く深い知識に基づいた実践に影響するのではないだろうか。

新型コロナウイルスによる学生の学びの質への影響が懸念され、今後の経過を見ていく必要がある。